

競争的研究資金獲得力向上経費・奨励的研究資金

研 究 者	所属・職名 人間発達文化学類・教授 氏 名 朝 賀 俊 彦
研 究 課 題	英語における脱名詞化現象の研究
成 果 の 概 要	<p>本研究は統語と意味の対応における語彙的インターフェイス研究の一環である。その目的は、英語の名詞構文を中心とした言語表現の分析を通じて、名詞の範疇を規定する基盤を明らかにするとともに、名詞にかかわる範疇特性の変化における法則性を明らかにすることである。</p> <p>平成23年度は、これまでの研究成果に基づき、英語のイディオム表現を中心に、脱名詞化現象について、主に意味構造における特性変化の観点から研究を進めた。英語における脱名詞化現象の事例として、形容詞的名詞構文や疑似部分構造をはじめとする名詞を含むイディオム表現を取り上げ、名詞が、ある一定の環境において、名詞的特性を喪失する一方で非名詞的特性を帯びる現象に対して語彙認可アプローチの観点から分析を行った。</p> <p>具体的には、上述の構文における名詞的特性の喪失過程について、Jackendoff (1987, 1990, 2002, 2007) および Culicover and Jackendoff (2005) などの意味層の概念を取り込んだ概念構造に基づき、指示性の観点から分析を行った。統語範疇が原理的にどのように特徴づけられるかという点について、生成言語学的アプローチでは、統語素性に基づく分析 (Chomsky (1970), Jackendoff (1977)) が導入され、さらに、統語素性の性質自体の実質的な追究が、Baker (2003) により行われている。このような背景を踏まえ、本研究では、まず、これらの統語素性に基づく統語範疇の分析など、生成文法理論において従来展開されてきた統語分析を中心に先行研究に対する批判的検討を行った。次いで、指示性を統語特性とする Baker に対して、指示性を指示層における意味特性として扱う意味層理論の妥当性を論じた上で、この意味での指示性に基づき名詞性が規定されるとの提案を行い、その帰結について考察した。また、Culicover (1999) で展開されている言語習得理論と語彙認可アプローチにおける範疇変化の取り扱いとの関連性について検討した。</p> <p>さらに、本研究では、言語学的アプローチと認知言語学的アプローチとの統合により、言語変化の取り扱いに寄与する可能性を追求した。これらのアプローチは言語機能の自立性など基本的な理論的前提において相容れないことが指摘されている。しかしながら、本研究で採用している並列モデルは、基本的には、生成言語学的アプローチの立場に立ちながらも、自律的統語部門と自律的意味部門を、語彙認可に基づく対応により関連づけるこの方法論を採用することで、これら二つのアプローチの知見を有機的に統合する可能性をもつ。本研究は、並列モデルにおいて、これら二つのアプローチの知見を統合する具体的方策を提示することにより、両者の統合の可能性について一定の方向性を示し、その妥当性を経験的に検証した。</p> <p>また、本研究は、独立した文法概念としての構文を認める立場をとる。上述の構文およびその変異形は、脱名詞化の特性を共有する一方で、相互に異なる統語的・意味的個別特性を示すことから、総体としてクラインを形成することを指摘し、言語の共時的変異および通時の変化に見られる段階性を、関連する構文が形成するネットワークとして捉える可能性について考察した。本研究は、構文を独立した文法概念として認める見解、および統語論の簡素化の仮説に従う形で、意味理論および統語と意味のインターフェイス理論の精緻化により、名詞構文の分析において統語論の役割が縮減されることを示した。</p>